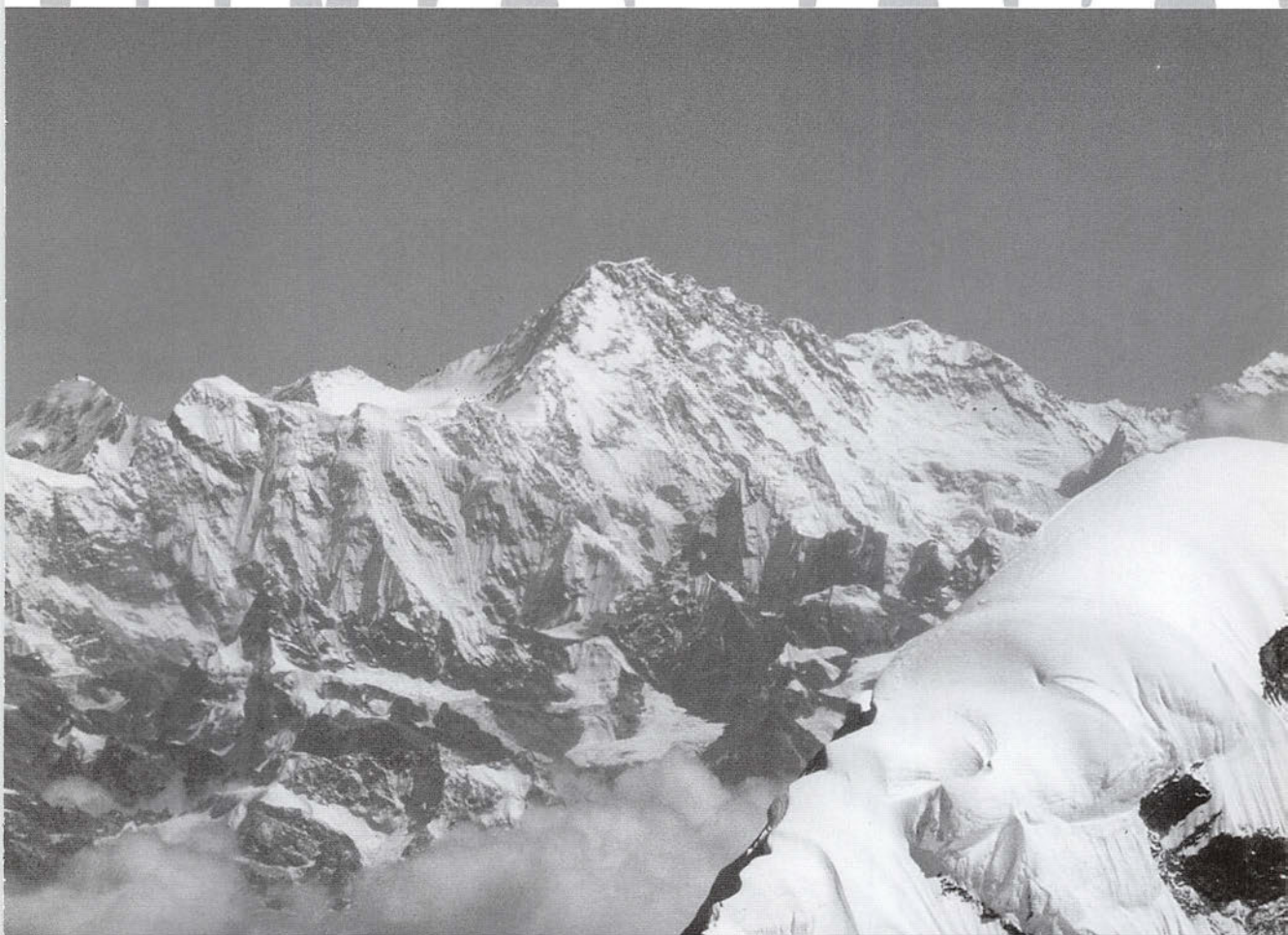


ヒマラヤ

No.375



2003 FEBRUARY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2003年H A J ニンチン・カンサトレッキング募集

H A Jでは来る創立40周年記念(2007年)として「カイラス(チベット名は、カン・リンポチェ)トレッキング」を計画しております。

しかし、カイラス巡礼コースは、おおむね標高4千メートル以上の高所にあり(最高所はドルマ・ラの5,630m) 高所滞在経験の無い方が、いきなりこのコースを希望されても、愉快的旅はのぞめません。

そこで、来年(2003年)から高所滞在を経験できるトレッキングを計画致しました。場所は、H A Jが4回サマー・キャンプを実施して熟知している「ニンチン・カンサ」西面です。宿泊する最高所はB C地の標高4,800mですが、そこに至るまでにじっくりと高所順応を行いながら、ラサの町並みをふかんしたり、4,750mの峠から美しい湖を眺望し、夏の高原をトレックしながら、幻の花ブルーポピーや咲き乱れる小さく可憐な花々との出会いを楽しんで戴こうというトレッキングです。

勿論、「カイラス」トレッキングには参加しな

いけれども、この「ニンチン・カンサ」トレッキングだけに参加を希望される方も大歓迎です。(2003年から毎年実施する予定です) 募集要項は事務局へ請求。

記

1. 期間: 2003年7月18日～7月30日(13日間)
2. 行程の概略: 成田～成都～ラサ(観光と順応) カンパ・ラ～ランカーズ(順応)～B C
3. 負担金: 395,000円
4. 参加資格: H A J会員(会員外は会員になって戴きます)。

表紙写真

ヤンラ・カンリ北面B Cは、ジーロン川右岸の高台にあるのかどかな村を通り、樹林帯の中に作られた。高台の村からはランタン・リルの雄姿を眺めることができるが、ヤンラ・カンリの東稜に登ると、東に大きくシシャパンマを見ることができる。南壁と左にある3つの山の中央がランタン・リ(7,205m)である。
(文: 山森欣一、写真: 萬徳清孝)

ヒマラヤ No.375

1. ネパール、ジョムソン・ムクチナートトレッキング 野沢井歩
10. 念青唐古拉山脈東部の最深部に行く(2) 中村 保
21. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books・ヒマラヤから〉
24. 寸感・事務局日誌

ネパール、ジョムソン・ムクチナートトレッキング

2002年10月13日～10月23日

記：野沢井 歩

はじめに

本年5月、H A J総会前に開かれた理事会においてH A J 35周年記念事業としてトレッキングを出してみたかどうかという提案が尾形常務理事より出され総会において決定された。この計画は当時、行きたくても行けなかった往年のH A J会員の方々に憧れのヒマラヤを見て頂こうという考えでスタートした。そしてジョムソン、ムクチナートを選んだのは、尾形氏にとって初めてのヒマラヤ登山となる'74年のツクチェ・ピークが根底にある。キャラバンのスタート地、ポカラで憧れの高級ホテル「フィッシュテール・ロッジ」に泊まり、当時入城が困難であったムクチナートへ足を伸ばしたいという計画である。(株)T H Iの田中祥治氏より具体的な日程、プランを建てて頂き、そしてちょうど時期的に体の空いている私がそれに同行する事となった。

ちょうど高橋照氏の「ロー・マンタンの空、遙かなり」がヒマラヤ連載中という事もあり往年の会員の方々より多数の応募が期待されたのだが…。結果、H A J関係者は3名だけに止まった。そんな折、日山協会長、田中文男氏の関係する山岳会の方々より参加の要望がありH A J内外を問わずこのトレッキング計画を成立させる事となった。

行動概要

〈憧れのネパールへ〉

6月13日、朝6:30羽田空港集合。山森理事長、T H I 田中社長の見送りを受け関西空港へ出発。関西空港で北海道から参加の佐藤さんと合流しR A機（ロイヤル・ネパール航空）にてネパールへ向け出発した。このR A機、機体は非常に小さく狭い（別称、空飛ぶ新幹線）。そして最近の航空機には珍しく後部座席が喫煙席となっている。そ

んなR A機だが長所は頻繁に酒が出される事である。すっかりビール、ワインでご機嫌になった頃上海で給油の為一旦降ろされる。空港の土産屋をひやかして再び出発、18:30定刻にカトマンズ・トリブバン空港へ到着した。

空港は改修工事中で、少しずつきれいになっていく。以前は入手困難だった荷物用カートも楽に入手出来る様になってきた。カスタムを全くノーチェックで空港を出るとスリヤトラベルの出迎えを受けロイヤルシンギホテルへ。

ちょうどダサインの祭りが始まったばかりでカトマンズはお祭りムードである。

〈ポカラにて〉

14日、早朝、国内線にてポカラへ。それにしても空港のセキュリティチェックは益々厳重になった。空港からは既にランタン・リルン、ドルジェ・ラクバなどの山々を望む事が出来る。飛行機に乗り込むと「右側の席からヒマラヤが望めるよ」と言っていたので皆右側の席を陣取るが、取りあえず安定飛行に入るまで左右均等に座ってもらう。

空港を飛び立つと雄大なヒマラヤのパノラマが展開する。まずガネッシュ・ヒマール山群が望め、スリンギ・ヒマールのチャマル、そして一際大きなマナスル3山へと景色は展開していく。特に



▲飛行機から見るマナスル3山

▼フィッシュテール・ロッジへのイカダ渡し



裾野を大きく広げたヒマルチュリが立派だ。黒々としたヘッドウォールを持つアンナプルナⅡ峰が現われ、有名なマチャプチャレが望めるとポカラ到着となる。あっという間のフライトだ。

空港へ降り立つと標高800mのポカラは暑い。しかし目の前には雄大な白銀をまとったマチャプチャレ、アンナプルナ連山になんとも心が洗われる思いである。

ペワ湖畔のフィッシュテール・ロッジへ。このホテルは以前日本の皇太子も宿泊した事のあるという由緒ある高級ホテルである。最近他にも高級ホテルが立ち並び少々過去のものとなった感も拭えない。このホテルの特徴はペワ湖対岸にありそこまでイカダで渡るところにある。そして部屋からはペワ湖畔に浮かぶマチャプチャレが望めるのだ。ホテルに着いた頃は生憎、雲が湧きマチャプチャレは姿を隠してしまった。

昼食後希望者を募りバスをチャーターしてサロンコットの丘へハイキングへと出掛けた。林道終点より一時間ほどのミニ・トレッキングだが、明



▲ジョムソンの空港

▼トレッキング・スタート



日から始まるトレッキングの良いトレーニングになった事だろう。

残念ながらマチャプチャレ、アンナプルナ連峰は雲の中、しかし眼下には緑豊かなポカラの街、ペワ湖が美しい。

帰路パタレ・チャンゴを見学してホテルへと戻る。

夜はビール、ウイスキーで遅くまで親睦を深めあった。

〈ジョムソン・ムクチナート、トレッキング〉

15日、早朝5時、まだ暗い闇の中。イカダで対岸へ渡りバスで空港へと向かう。朝靄の中マチャプチャレ、アンナプルナ連山が薄っすらとその雄大な姿を現し始めた。まさに幽玄な雰囲気。しかしその雰囲気に浸る間も無く、小さな航空機に乗り込みポカラを後にした。空港を飛び立つと更に間近に巨大なマチャプチャレ、アンナプルナ連山が眺められ最高のマウンテンフライトとなった。そしてダウラギリ南壁、ツクチュ・ピークを間近に望みながらゴラパニ峠をすれすれに越えるとカリガンダキ溪谷沿いを飛ぶ。次第に荒涼としたチベットの風景と変わりジョムソンへと到着した。

私はこの地を訪れるのは'93年のダウラギリ登山以来だが、その時はポカラから1週間程の道のりを歩いたものだが、今回は飛行機でたった25分、なんとも勿体無く感じてしまう。

9年ぶりのジョムソンは立派な空港が建ち、ツーリスト向けゲストハウスも多数立ち並び大きく変貌してしまった。そしてここジョムソンにはファイブ・スターの高級リゾートホテル「ジョムソン・マウンテンリゾート」が数年前完成。今回帰りは

▼エクリィ・バッティー



そこへ2泊する計画なのである。

荷物出しの時間を利用してスポニチ登山学校式に空港の空き地でストレッチを行なうと他の西洋人トレッカーから随分と注目を浴びてしまった。

ジョムソンの街では名産品のリンゴを始め朝市が開かれている。

荷物を馬に積み込むと私達は4人のシェルパと共に出発。いよいよトレッキングの始まりだ。ジョムソンの街を抜け、カリガンダキ沿いを歩く。

この河原では太古の化石アンモナイトを多数拾う事が出来る。今回私も2つ程見つけたが、シェルパはかなり立派な物をいくつも拾っていた。

2時間程歩き、「一軒の茶店」という意味のエクリィ・バッティで昼食。現在はバッティーも4軒ほどに増えている。

今トレッキング中の昼食は全てホットランチで、昼食場所にはあらかじめ到着しているコック達によって用意されている。

昼食が終わるとカリガンダキ名物の風が吹き始めた。全員サングラスに帽子にマスクといういでたちでさながら強盗団の様である。



▲カリガンダキに現れた女性強盗団？

▼ガグベニ、ムスタンへの玄関口



40分程歩き荒涼としたカリガンダキのオアシス、カグベニに到着。街は平屋根のチベタン風の家にチョルテン、そしてストゥーパ、が立ち並び。街の周辺には蕎麦、麦などの畑が広がりカグベニの豊かさがかがえる。そしてここはムスタン王国の入り口で、町外れの検問所には、常にポリスが銃を持って見張っており、まだまだ重々しい雰囲気漂っている。

ここでバター茶(チベタンティー)、チャン(ドブロク)を飲みチベットの雰囲気を体験してもらう、そして今夜からテント泊。

16日、夜半まで吹き荒れた風も止み、早朝のカリガンダキは静寂だ、真っ白なニルギリの北壁に朝日が当たる。

ここからムクチナートへはカリガンダキを離れジョン・コーラの谷沿いの道へと入る。一時間ほど砂漠化した丘陵への急登を登り振り返ると真っ白なダウラギリ、ツクチェ・ピークが現れた。道は平坦となりダウラギリの雄大な景色の中のものごとくムクチナートを目指す。

赤茶けた荒涼とした景色の中に平屋根のチベッ



▲蕎麦の脱穀風景

ト風家々の集落が望め、刈り入れ時を迎えた麦、蕎麦の畑が連なる。そして村々ではその蕎麦を細長い板で叩く、脱穀の真っ最中であった。この蕎麦は日本の様に麺で食べるのではなく、パンの様にして食べるのだ。

目指すムクチナートの先にはヤカワ・カンとカータン・カンが望め、その谷間がトロン・パス (5416m) となる。一ヶ月程掛かるアンナブルナ周遊トレッキング・コースの難所で、この峠を越えればマルシャンディーへと降り立ちアンナブルナ北面そしてポカラへと出る。

赤茶けた丘陵を越え、チベタン風の家々が密集しているジャルコット (3550m) で昼食。空気は乾燥し、日差しは強烈ですっかり真っ黒に日焼けしてしまった。

昼食後更に小一時間程登り大きな門をくぐるとラニボワに到着。ここからムクチナートへは20分程の道のりだが宿泊は出来ない。一般的にここラニボワに宿泊しムクチナート巡礼へと出掛ける事になる。

ここラニボワは標高3700mで富士山とほぼ同じ高さだが、皆いたって元気でそれぞれ買い物へと

ジャルコットを振り返る、後はタシ・カン

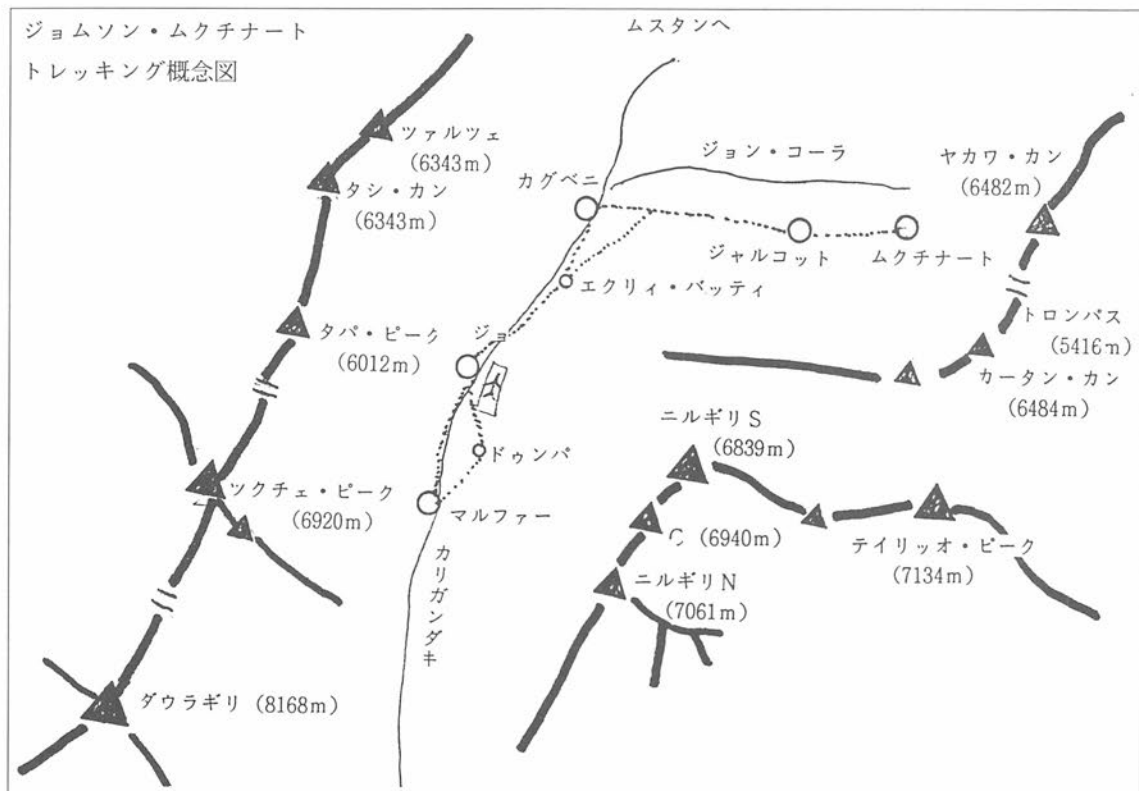


出掛けていった。

17日、朝食前にダウラギリをバックに全員で集合写真を撮影。そしてムクチナートへと巡礼トレッキングへと出掛ける。

ここムクチナートはヒンドゥー教、チベット仏教の聖地だが、お互いの宗教は混在し、巡礼者も関係なくこれら寺院を参拝している。

まず始めにヒンドゥー教寺院を参拝。このお寺の回りには108個のダラ (蛇頭) より聖水が流れこれを全て飲むと今までの罪が清算されるという。続いてチベット仏教寺院ゾラマイ・ゴンパを参拝



▼ムクチナートでの集合写真



する。本堂祭壇の奥には青白い聖なる炎が見える。これは天然ガスが湧水から吹き出したのが燃えているのだ。

お寺の参拝の後は気分のいい裏山のハイキング。小さいながら花も咲いており皆感動していた。白銀のダウラギリと赤茶けたチベット風の風景がマッチしている。

この夜はシェルパと最後の夜となる為、ビール、チャンを飲みながら宴会を開く。スタッフがケーキを焼き、唄そしてダンスが始まる。どこからともなくフランス人トレッカーも乱入しての大宴会

となり多いに盛り上がった夜となった。

夜中、降り出した雨も明け方にはあがった。

18日、あいにくの曇空。ヒマラヤの山々は見ることが出来ないが空気は乾燥しており陽射しの無い分快適にカリガンダキまで下山。

天候が悪い為か昼にエクリィ・バッチェーに着いた頃には早くもカリガンダキ沿いは激しく風が吹き始めていた。ここで昼食の後、大きな吊り橋で対岸へ渡り右岸沿いにルートを取る。右岸沿いの道は多少この風を防げるのだ。

ジョムソンに入り、今宵の宿「ジョムソン・マ

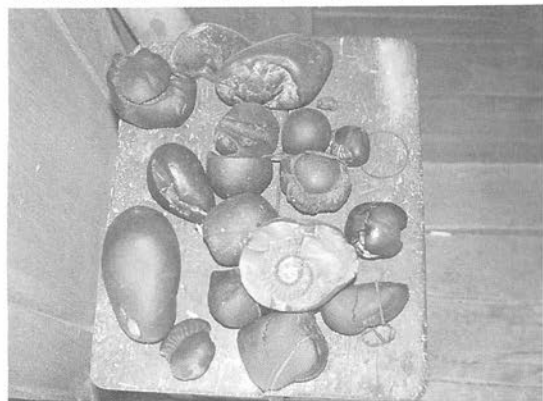


▲ヒンドゥー寺院のダラ(蛇頭)からの聖水



▲ムクチナートからのダウラギリ連山

▼カリガンダキ名物、アンモナイト



ウンテンリゾート」へ。しかしこの高級ホテル、景色の良い高台に作られている為30分程登らなくてはならないのである。グッドタイミングでホテルの送迎トラクターがやってきたのでまず荷物を運び、その後皆で乗り込む事となった。しかしどうみてもこのトラクター我々全員を運べる代物には見えない。案の定坂を登り始めてすぐに皆降りて歩く羽目となった。ポカラのフィッシュテール・ロッジにしても高級ホテルとはなんと面倒な場所に作られているのだなと実感させられた。

このホテル建物は石造りとなっており、部屋からは大きな窓越しにニルギルが眺められる。

19日、ジョムソン周辺のトレッキングを兼ねて隣町のマルファーへと出掛ける。希望者は馬に乗ってのトレッキングで馬組と歩き組とに別れる。

カリガンダキを渡りドゥンパ湖へ。ここは聖なる湖らしく沢山のタルチョーがはためている。そして沢山の魚影。再びカリガンダキ沿いに降り立ちマルファーへ。馬組みもなんとか順調に進んでいる。



▲ジョムソン・マウンテンリゾート

▼馬でのトレッキング、マルファーより



マルファーは蕎麦、リンゴが有名な街で石作りの家々は白く彩られ、何処かヨーロッパ風の町並みの様だ。私はダウラギリ登山の折りこマルファーには連泊していたので懐かしさもひとしおであった。

ある一軒のバッチェーで昼食。ダル・バートに数種類のタルカリ、マス、アチャールと味付けが本場ネパール風でこれまでツーリスト向けの味付けの薄い食事に辟易していたので、私にとって今回最も美味しい食事となった。そして名物、リンゴで作ったお酒、アップル・チャン、アップル・ロキシーを頂く。

20日、早朝一番のフライトでジョムソンを後にする。ダウラギリ、ニルギリに別れを告げあつという間にポカラへ到着。ジョムソンより一挙に2000mも標高を下げた事になりポカラは暑く、空気の濃さが実感出来た。

カトマンズ行きのフライトを待つ間、ポカラ観光をする者、2人乗り小型飛行機で遊覧飛行を楽しむ者と各自楽しむ。



▲マウンテンフライトから見るサガルマータ

▼高級ネパール料理に舌鼓



カトマンズ到着後、午後は自由行動。

〈カトマンズ市内観光、マウンテンフライト〉

21日、早朝、オプショナル・ツアーとなるマウンテン・フライトへと出掛ける。参加しない二名はナガルコットの丘と世界遺産バクタプール観光へと出掛けた。

さてマウンテン・フライトだが、始めカトマンズ盆地は雲が厚く垂れ込めていたが、飛行機が雲を突き出るとヒマラヤの峰々が飛び込んできた。ランタン・ジュガール山群、遠くに大きなシシャバンマが立派だ。間近にガウリンシャンカール、メンルンツェを眺め、いよいよ世界最高峰サガルマータが現れる。遠くカンチェンジュンガも望め、巨大なマカルーの辺りで旋回しカトマンズへ戻る。これで今回、このトレッキングで8000m峰14座中実に9座の峰々を眺めた事となった。

午後はスワヤンプナート、旧王宮のヒンドゥー教寺院を見学など市内観光。夜はバンチャガールでネワール・ロキシーを飲みながら高級ネパール料理に舌鼓。

22日、午前中、ネパール最大のヒンドゥー教寺院パシュパティナート、世界最大のチベット仏教ストゥーパのボダナートを観光した。昼食はローカルな食堂のダルバードに挑戦した。各自お土産の買い物も終え、RAの夜行便にてネパールを後にした。

23日、関西空港到着そして国内線で羽田空港へ。山森理事長、岩崎常務理事の出迎えを受け11日間のネパールトレッキングに幕を降ろした。

終わりに

人にはそれぞれ事情がある。それは家庭であったり、仕事であったりと人それぞれである。そんな中、それら事情をやりくりして今トレッキングに参加された方々のそういった話しを伺う度にヒマラヤ協会として今回のトレッキングを開催して良かったと思う。

現在、ムクチナートは多くのトレッカーが訪れ、以前の秘境というイメージからは遠い。しかし、憧れの雄大なヒマラヤ、そしてネパールという国を充分満喫できた事と思う。

幸いH A J はここヒマラヤに関して沢山の引き出しを持っている。今後更にこのような機会を設けてみてはいかがだろうか。

最後にヒマラヤ協会関係者各位、(株)THI、スリヤ・トラベルには大変お世話になりました。そしてプロのツアー・リーダーでない私に11日間お付き合い頂き有り難うございました。ペリ・ベトウンラ、ナマステ！

トレッキング・メンバー構成

実行委員長：尾形好雄（H A J 常務理事）

L：野沢井 歩（38）（H A J 専務理事）

芝田 信子（66）埼玉

畠山奈ミ子（65）東京

荒木 仁美（64）埼玉

村上 淑子（63）埼玉

仁木 紀子（62）埼玉

秋吉紀代子（62）埼玉

高橋 孝江（61）埼玉

澤田 幸子（61）東京

大峽 美枝（60）埼玉

長谷川和雄（56）神奈川

佐藤千恵子（52）北海道

石田里千代（52）埼玉

堅田 秀子（51）埼玉

早船 光昭（41）埼玉

井沢 士郎（40）埼玉

ジョムソン・ムクチナート トレッキングに参加して

ムクチナート・トレッキングに参加して

記：芝田 信子

山を歩き始めて30年。最初はヒマラヤ連峰の一座をアタックしたいものと雲をつかむような事を思い、叶わないままに長い年月を経て、今度はトレッキングにランクを落として機会を待った。やっと訪れた「ヒマラヤ・トレッキング」それは「ムクチナート」への旅でした。思うままに。

〈嬉しかった事〉

◎ テントでの湯タンポ。—まさか？日本で忘れかけているトタンで出来た楕円形の湯タンポが。有り難う。

◎ キッチンスタッフの作る洗面器のお湯と一杯の目覚めのTea。—女王様の気分になる。主人にもその様な事をした経験は一度も無い。

◎ 手で掴めそうな星空。

◎ フィッシュテール・ロッジ——ベワ湖をイカダで渡る楽しさもあったが、庭、花達、雰囲気、料理等々すっかり満足の宿だった。

◎ マチャプチャレ——ロッジの名のごとくフィッシュテールかと思っていたが、初めてボカラから拝した憧れの「マチャプチャレ」は天高く聳え、その姿堂々として美しく、すっかり魅了されてしまった。誰にも踏破されていない「神の座」が又良し。

◎ ロバで行くドゥンバ湖——初めての「馬上の人」経験。コツは馬に体を預ける事とみたり。馬がコトコト急ぎだしたら、鎧を踏み、腰を少々浮かし、馬のリズムに合わせ、お尻を上げたり降ろしたりし、体を少し前傾しながら馬と一体になる事。馬を楽にさせてやる事と見たが？（馬方の少年から見たら間違いのお笑いかもしれないが）

◎ 待望のバター茶——チベット、ヒマラヤと言えばバター茶。と本から得た知識が頭から離れず、どうしてもテント場で味わってみたい、キッチンにお願いしてみた。結果「絶品」とは行かないが、程よく飲める飲み物であった。

◎ ダウラギリ、アンナプルナ、マナスル、ローツェ、マカルー、カンチェンジュンガの勇姿。

特にマカルーは埼玉岳連が挑戦したピーク。登頂出来なかったとはいえ、とても気になる一座であった。どっしりと構えた姿に惚れ惚れする。さすが！県岳連、狙い所満点。

◎ 街での食事—「古都」「トリベニ」—美味しかった。

◎ パシュパティナート——ネパール最大のヒンドゥ教寺院。静かで古を思い出させる雰囲気。

〈意外だった事〉

△ ジョムソン・マウンテンリゾート——街より一段高い丘の上に建つ素晴らしい5つ星のホテル。しかし、木造建築に憧れた私には、石造りの館は、冷たさのみが感じられた。食事今一つの感あり。

△ エベレスト——世界最高峰。思い描いていた最高峰の威風堂々ではなかったのが残念。勝手に想像していただけなのかも知れないが。「槍ヶ岳」より「穂高岳連峰」が好きと言う私の山への好みであるかも知れない。

△ 「たむら」——味と雰囲気はカトマンズ随一とあるが？

〈残念だった事〉

※ ムスタン高域—ムスタン・ストップの立て看板が残念。許可証がなければ通行不可。ウーム。

※ もう2～3日、静かでのんびり大きな山々を眺めながら、丘を歩きながらのテント暮らしを続けたかった。喧騒と埃舞い上がる街は疲れる。

※ ナマステ——日本の「こんにちは」風に軽いものでは無い様に思えた。「こんにちは、よろしくね」と、心からの挨拶をしたいものと思った。

☆

野沢井隊長を初め、関係者の皆様には大変お世話になりました。勝手な事を思い付くまま書いてしまいました。世迷い事と一笑して下さい。有り難うございました。心から感謝申し上げます。

ネパールのトレッキングに参加して

記：澤田 幸子

H A J の創立35周年記念という事で、短い日数なら私も何とかやりくりできるので参加した。

しかしH A J会員の参加が意外と少なく拍子抜けの感じがした。トレッキングでのヒマラヤ行きも初めてである。そしてこんな楽をさせてもらっているのかしら…と思った。

聖地ムクチナートへは連日好天に恵まれ、ダイナミックな山々を眺めながらのんびりと歩く。憧れてはいても中々行きにくい所へ訪れる事が出来て良かった。

空から見るアンナプルナの山々は、特に圧巻だった。M. エルゾーグの「処女峰アンナプルナ」を読んで感激した時の事を思い出した。

またダウラギリの勇姿は、悲しい事故の記憶や9年前の野沢井さん達の登頂話などいろいろな事を考えさせられた。

企画日程が良かったので、毎日余裕を持って行動出来、初期の高山病らしき心配もなかった。しかし立派すぎるホテルに泊るというのは、慣れていないので戸惑った。

眩しい白銀の山々を眺めていると、やはり登りたくなってしまう。私の手に届きそうな山ならもう少し頑張ってみよう…かな、などと考えつつ帰途についた。

トレッキング雑感

記：長谷川 和雄

ヒマラヤ協会に入会したものの現役の辛さ、長期休暇が今の世の中とても無理。一回の遠征に参加する事も無く数年が過ぎてしまった。何か協会と繋がりを保てる策はないかと思いつつも毎日を無作為に過していた。

そこに35周年記念イベント。トレッキングではあるが短期間でのヒマラヤ行きの話し。そして協会からは野沢井さんの同行があるとの事、会社への根回しもそこそこにこの話しに飛びつく。結果、H A J会員は澤田さん、佐藤さん、そして私のみ。後は埼玉の山岳会の面々と男性2名の計16名。出発前は少々寂しい気がしないでもなかったが、いざ関空からカトマンズ、ポカラ、ジョムソンと進むうち、野沢井リーダーの多大な配慮と、参加者自身の心遣い、又天候にも恵まれとても楽しい旅となっていた。カリガンダキの砂埃には少々まいりながらも16日ムクチナートへと入る。多少高

▼レッスン・フィリリを踊る長谷川さん



度の影響が出ている人もいるみたいだが、ムクチナートの境内、ジョラムキ・ゴンパを訪れるととても神聖な気持ちとなる。又、ダウラギリの展望もとても良く、'93年野沢井リーダーが登った北東稜も良く見え、その説明には全員感激。夜にはシェルパダンスにフランス人も混じり、楽しい一時となる。

18日、ムクチナートを後にカリガンダキの広い河原を、又、砂埃に揉まれながら「天空の城」ジョムソン・マウンテンリゾートへ下る。実際には「天空の城」とはいかないが、参加者全員、久しぶりの風呂に感激。又、建物、部屋、テーブル迄も石造りで「さすが！」の一面もあった。

翌日には、全て歩く人、馬に乗る人と分かれ、野沢井さんに言わせれば、昔の面影が無い程綺麗に様変わりしたマルファーマでのトレッキングを楽しんだ。

20日、ホテル正面に聳えるニルギリの展望を思う存分楽しみつつ、空港へ向かう朝は全員寂しげな面持ちであった。帰路のカトマンズでは普段ではとても出来ない市内観光が出来、スワヤンブナート、ダルバール広場、パシュパティナート、ボダナート等、場所によって犬着き、猿付きの大変興味深いものであった。

22日、夕食は「古都」で食べ（全員満足）、深夜カトマンズを後にし上海経由、日本へ向かう。機内では23日の朝になると今回のトレッキングの話しで持ちりであった。羽田では山森理事長、岩崎常務理事の出迎えを受け感激。私にとっても色々な意味で有意義な旅であった。又の機会にも是非とも思いつつ筆を擱く。

念青唐古拉山脈東部の最深部に行く(2)

2002年4－5月

中村 保

■辺境の新しい風－再び未踏の氷河へ

怒江の支流の谷間にある新辺坝(3650m)は県政府のある町である。公路のどん詰りの町と思っていたが、現実には急速に変わりつつある。西部大開発の「新しい風」が東チベットの最奥、このカンパたちの辺境にも吹き始めている。町のスローガンは「開発」、大規模な護岸工事と住宅建設が進められている。最近、怒江のほとりの那曲県比如を結ぶ道路も開通し、陸の孤島から脱却した。ラサまで車で3日で行けるようになり、昌都廻りと比べて3日短縮できる。工事関係の出稼ぎの漢族や近在のチベット族が働きにきて金を落とすので、街は洛隆より活気があるが、荒ぶれた街との印象は否めない。新辺坝の建設ラッシュは、特別に理由がある訳ではない、他のチベット自治区の県と同じように中国政府が辺境の開発に力をいれているからだと言ふ。が、インフラの整備はこれからである。招待所にトイレも水道もない。ゴミは捨て放題である。二階から平気で川にゴミを放り込む。階段で小便をする。チベット族の遊牧民は自分の家の中は比較的清潔にしているが、街中や公共の場所では散らかし放題で、ゴミを片付けるといふ観念がない。見ていてやりきれない気持ちになる。汚染は深刻である。

5月6日、晴後曇。7:30、1℃。午前9時に新辺坝出発、公路に戻る。第二ラウンドの探査が終了した後の旅程をどうするか決心しかねていたので、嘉黎へのキャラバンが可能かどうか、草卡で情報を集める。村人の話しを総合すると、旧街道を辿り7－8日で嘉黎に行けそうである。草卡から車で30分ほどのダンバという村がキャラバンの出発点になる。そこで馬を雇えるし、峠の状態も分かる。嘉黎までに二つの峠を越える。最初の峠は探検記にでてくるシャルグン・ラ(5037m)である。ダンバから1日で越えられる。次の峠は

ノコ・ラといいダンバから4日かかる。ダンバから嘉黎まで約7日の行程である。

現在峠を越えられるかどうかは、ダンバで訊かないと分からない。ということで、草卡では確実な情報を得ることができなかった。シャルグン・ラ越えは恐らく雪のためまだ無理だろうと判断する。A-Kもペレイラもこの峠を越えた。英国の色浦崗日の隊も越えている。「(西から)シャルグン・ラへ上る途中で、この障壁山脈(念青唐古拉)の6000mを超える高峰の素晴らしい眺望を………」と、詳しい東チベット情報を載せている唯一の英語のガイドブック“Tibet Handbook”(Gyurme Dorje)に書かれている。今回の計画のハイライトに考えていたので残念である。

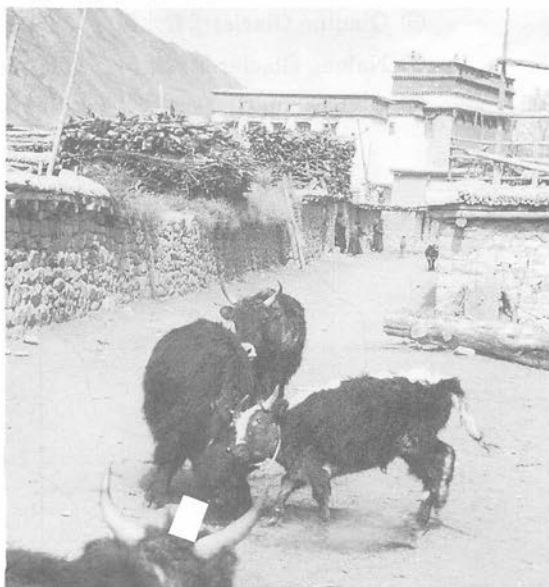
10時半、旧辺坝の村外れで「天葬」をみる。時間が遅かったので、骨を砕いて禿わしに与えているところだった。旧ペンバは歴史を感じさせる村である。文革のとき破壊された僧院がそのまま無残な姿を曝している。新しいラマ僧院が村の中心に建てられている。BC1の普玉への分岐点を通過し、拉孜の西の峠への上り口で公路から離れてBC2への谷に入る。河原は広く平坦で、地形は普玉の谷とよく似ている。幸い乾季で水量が少ないので、車でBC2まで入ることができた。数カ所車で流を横切るので、雨期の水量が多いとき車ではいるのは不可能であろう。天気は雪、霰、強風と目まぐるしく変わるが、ダムドル村を過ぎて午後1時、谷の二俣のベース・キャンプ(BC2、4170m)に着く頃には晴れてくる。左岸にテントを設営している間に偵察のため左岸の斜面を30分ほど登る。左の谷の氷河湖とゴヨンI峰(6252m)とII峰(6140m)の二つのピークが美しい。昼食後広く開けた谷を下りダムドル村の前で橋を渡って右岸の放牧地を横切る。BC2からみて右の谷の氷河源頭にチュンジュンツォ峰(6204m)の存

在を確認する。

ダムドルは22戸、120人の村である。人の気配がない。今の時期は大方の村人は冬虫夏草採りにでかけ、馬は高所の牧草地にいる。一部の村人は新辺坝の工事に出稼ぎに行っている。谷を見下ろす左岸の山腹にニンマ派（紅帽派）のダムツェデン寺がある。ここも文革のとき破壊された。廃墟の横に現在の寺が再建されているが、もとの寺より小さい。かつて30人いた僧侶も、今は19人である。BC2に遊びにきた若い僧侶の説明によると、この寺は由緒ある僧院である。インドの蓮の花から生まれたといわれるパマサンボアは八世紀にチベットで最古の僧院をラサの近くに創建した。パマサンボアはニンマ派の開祖であり、この辺りにも住んだという逸話が言い伝えられていることが関係しているらしい。が、かつての名刹も今は経済的には苦しいようだ。都市に近い僧院と違い、僻地の寺は寄進が少ないので生活は苦しい、畑を耕し自給をしないと食べていけないと言う。

ダムドルの谷はベース・キャンプの位置（北緯30° 40'）でいうと普玉の谷からほぼ真東に27km離れている。地形は似ていて、平坦な広い河原の谷はどん詰まりで二俣に分かれる。ツェンポー・怒江（サルウィン）分水嶺から尾根を挟んで二つの氷河が北東および北西に下って谷は二俣で合流する。山裾は顕著な氷蝕の跡が帯状に残っているのも普玉の谷と同じである。両方の氷河とも生成中の氷河湖がある。左（東側）の谷の氷河は末端から分流点まで6km、さらに源頭まで右へ3.5km、左へ7km延びている。長いほうで全長13kmある。分水嶺の南側は易貢蔵布の14kmの麻果龍氷河がある。源頭には六つの6,000m峰が連なる。右（西側）の谷の氷河は末端から分流点まで4km、さらに源頭まで右へ3km、左へ4km延びている。長いほうで全長8kmである。分水嶺の南側は那龍氷河の分流と無名の氷河がある。源頭には四つの6000m峰が氷河を囲む。左の谷からのモレーンは二俣のところまで達しており、右の谷からの流れをブロックしている。BC2はそのモレーンの手前に設営される。左の谷にゴヨンII峰（6140m）の均整のとれた三角形の山容と右岸の山裾に沿って際立った氷蝕の跡がBC2から見える。

▼旧辺坝の村風景



5月7日、快晴。7:00、マナスル6℃。午前8時半、右（西側）の谷の偵察に向かう。午前8時半BC2を出発。流に沿って左岸の緩やかなヤク道を上る。前方に開けた谷が視界に入ったところで一旦広い河原に下る。氷河の奥に山塊の最高峰、チュンジュンツォ（6204m）から西に連なる雪峰が眩しい。1キロほど歩くと二軒の村に着く。屈託のないチベット族の老若男女と子供が繰り出て現れる。外国人は初めてのようだ。ガイドを連れて来なかったと言葉が通じないが、表情と身振りから好意は伝わってくる。中年の女性が道案内を買ってでてくれる。この村の少し先で谷は狭まり、ふたたび広がった先に氷河湖がある。道は左岸のガレ場を急登し、尾根の上の牧草地をしばらく行くと石のゴロゴロした斜面にでる。正午に左足下に氷河湖を俯瞰するルックアウト・ポイント（4450m）に着く。快晴だが氷河から吹き降ろす風は冷たい。視界が開け、大パノラマが展開する。S字状に下る左側の幅広い氷河の源頭の奥にチュンジュンツォの白雪の頂上がある。厳密にいうと分水嶺から僅かに南に寄っている。生成中の青い湖面には水が浮いている。氷河の末端は十数メートルの氷崖になっている。

帰路村に着くと村人は我々のために家の前にマットを設え、バター茶、ヨーグルト、チーズを用意して持ってきてくれる。嬉しい歓待であるが、腹

-
- 31° 00' N
- 93° 30' E
- 94° 00' E
- Glacier
- Lharigo
- 6956
- Sepu Kangri
- Ko Kpo
- 6302
- 30° 40' N
- 嘉黎 Lhari
- Banda La
- 5330
- 4460
- Atsa Tso
- 阿扎措
- 6131
- 6023
- 6203
- 5200
- Keng La
- 6112
- 6160
- 6015
- 6447
- 6425
- 6521
- 6205
- 6041
- Yigong Tsangpo
- 6058
- 6087
- 6347
- 6842
- 6170
- 6230
- 6501
- 6187
- 6162
- 6582
- 6407
- 6150
- 6180
- 6025
- 6170
- 6691
- 6552
- 6870
- 6150
- 6180
- 6284
- 6210
- 6132
- 八松湖 Lake Basong
- 30° 20' N
- フンカ Punkar
- 朱拉 Jula
- 3500
- 6380
- 5302
- 6030
- 6150
- 6180
- 6210
- 6284
- 6132
- 八松湖 Lake Basong

Nyainqentanglha East in Eastern Tibet

—6,000m Peaks and Glaciers—

94°	30'E
-----	------

(新) 边坝 (New) Pelbar 3650

(Old)
○ Pelbar
(旧)边坝

Kila Pu
Δ6110

Alando

Bake

藏一頁

Yigong Tsangpo

易貢措

3500
由a結巴

▲-----Map of PI

△-----Russian t

の調子を考え程ほどに頂戴する。二人の若い女性の顔の模様がひどいあばたのようにみえる。刺青かと好奇心が刺激される。雲南やミャンマー北部の独龍族はかつては戦争のときに女性が攫われないために顔に刺青してわざと醜くする風習があり、今でもあばたのような刺青の女性がいる。チベット族に同じ風習があるとは知らなかったの、すわ新しい遭遇かと緊張したが、よく見ると色を塗ったように見える。BC2に戻ってガイドのタシに訊いたところ、笑われた。それは手製のインクで描いた娘さんの化粧で、洗えば消えるし、毎朝描く、皆さんを迎えるために念入りに化粧したのだらうと言う。お土産に縫い針をあげて別れを告げる。西川一三の『秘境西域潜行八年』にヒントをえて毎回縫い針を持ってきて、奥地のチベット族にあげているが、西川の時代ほど貴重品ではなくなっている。当然だろう。便利さが浸透しつつ、冬虫夏草の現金収入がある現在、小物で喜ばれそうなものは思いつかない。午後4時、BC2に帰着する。雲が出始め気圧下がる。夜半より雪になる。

5月8日、雪後曇。8:00、2℃。3cmの積雪あり。永井さんは休養し独りダンツェデン寺を訪れる。私と河西さんは左（東側）の谷に入る。河西さんはBC2の前の流を渡渉してモレーンを横断し右岸の氷蝕沿いのヤク道にとりつく。私は川の中で転倒するのが恐い。一旦ダムドル村まで平坦な河原を下り、橋を渡って右岸に移り迂回して河西さんの後を追う。ヤク道はガレ場から樹林帯に移る。この辺りは背の低い針葉樹が多いが相当伐採されている。切り株が目につく。右手眼下に氷河の末端と氷河湖を見下ろす少し先で、ヤク道が崖崩れのため寸断されている。この崩落地点（4440m）からはまだ展望はきかない。上部の幅広い氷河と東奥のピークを見ることができないのは残念だが、午後2時半に安全をとって引き返すことにする。帰路ゴヨンII峰の西に連なるヒマラヤ巒が発達した迫力のあるピーク（6156m）を見るためにダムドル村の上にあるダンツェデン寺（4310m）まで上る。ここでも文革による破壊の痕が痛々しい。寺からでも良い眺望は得られなかったが、若い僧侶は親切でしきりに中に入るよう奨

めてくれる。午後7時半にBC2に帰着する。夜半から冷え込む。

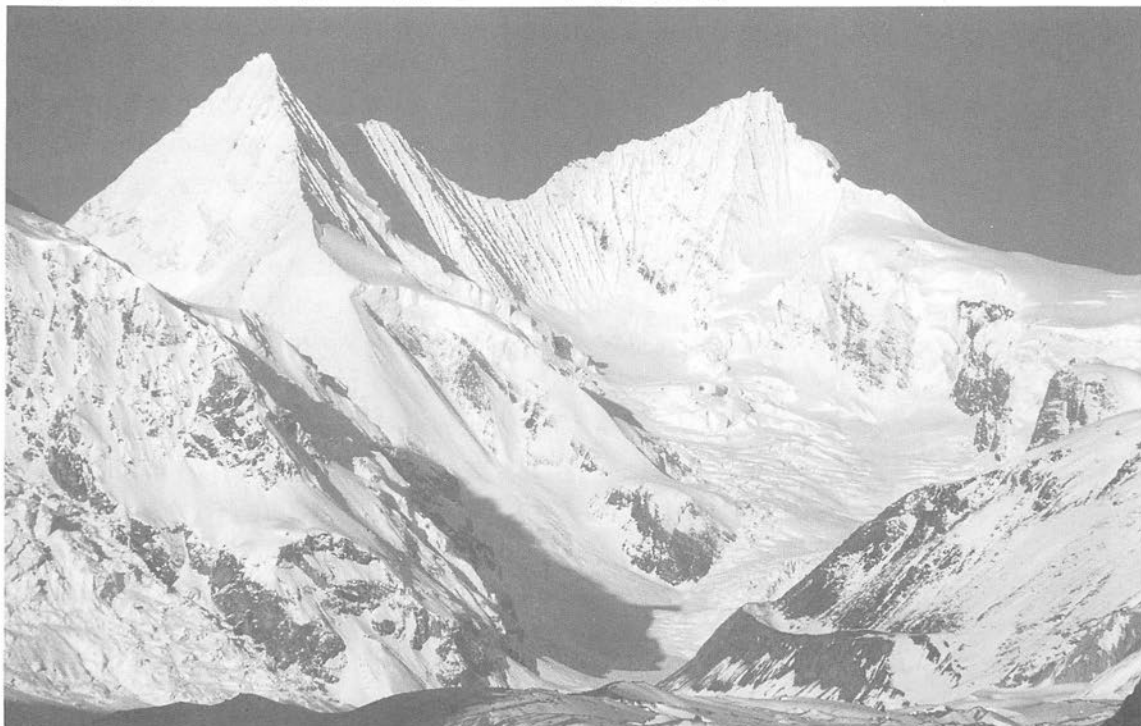
■昌都から川蔵北路へ

5月9日、快晴。7:00、マイナス4℃。氷河と山の探査は昨日で終わった。BC2を撤収し、午前9時半に出発しダムドルの谷を下る。12時半、拉孜の西の峠（4490m）で上半身を顕わしたヒマラヤ巒の美しい無名峰（6156m）北面の写真を撮る。これで念唐古拉山東部の6000mの高峰とはお別れである。来た道に戻って東に向かう。12時に4,730mの峠、午後2時に4440mの峠を越える。雲がでてきて小雪が舞う。3時半洛隆着、農行招待所に到着して間もなく、約120km先の地点で橋の修理が始まったので3日間交通止めだ、とタシが知らせにくる。このニュースを確かめるため交通局に出向いて訊く。結果はそのとおりで、迂回路は無いと言う。洛隆に三泊せねばならない。観念する。5月10日は旧洛隆、現在の康沙に出かけて時間をつぶす。この地方を襲った文革の狂気の嵐はラマ僧院を徹底的に破壊したようだ。翌日は雨後曇、「天葬」の場所をもういちど訪れる。

洛隆で帰りコースを決めなければならない。波密へ越える分水嶺の峠は雪で閉ざされているし、川蔵南路は大崩落帯の工事区間が5月21日にしか通過できないとなると、南周りで帰るのは日数がかかりすぎる。一方、北周りは悪路ではあるが、初めての経験なので旅のそれなりの魅力はある。途中の6000m峰にも関心がある。距離は長いが昌都にでて川蔵北路を行き、那曲から青蔵公路を南下してラサに帰るルートを選ぶ。

5月12日、曇。7:20、6℃。午前8時過ぎに出発する。さらば洛隆、もういちど来ることがあるだろうか、感傷的な気分になり辺境の街を振り返る。今日は昌都まで五つの峠を越えるロング・ドライブである。怒江の加玉橋を渡り、馬利を過ぎ午後1時半に修理している橋の袂で止まる。後から来た車もストップする。そのうちの1台が昌都の郵便局長の車だったことが幸いした。局長は工事現場に行き、一刻も早く開通するようはっぱをかけている。お蔭で1時間足らずで通ることができた。怒江・玉曲の分水嶺の峠（4780m）を越えるあたりから急変して雪模様になる。昌都・那

▼普玉の谷、コナⅠ峰（6,378m右）とコナⅡ峰（6,344m左）

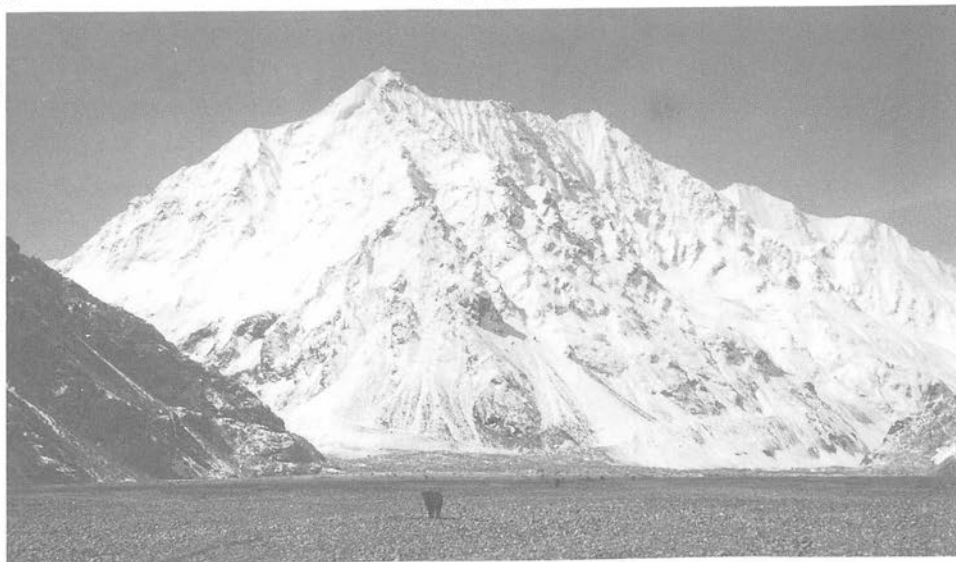


達公路との分岐点（4400m）あたりから横殴りの風雪になる。寒い。視界は殆どきかない。午後5時、怒江・メコンの分水嶺の峠、浪拉山（4570m）を越えると公路はメコンの谷へ下る。雨に変わる。6時、メコンの支流、紫曲（3280m）まで下り、もう一つ峠を越えてメコン川に出て右岸を北上、午後8時に昌都（3250m）に着く。三つ星の昌都飯店に泊まる。ハードな一日だった。久しぶりにシャワーを使う。

5月13日、曇。8:00、6℃。公安が永井さんの部屋にチェックに来たので、タシが我々三人のパスポートを持って公安局に登録のため赴く。今日は昌都見物にあてる。

探検記や西川一三の本を読んだ人は、昌都（チャムド）という遠く近づき難い、謎めいたチベットの辺境の地にある種の憧憬を抱くだろう。私もその例外ではない。東チベット・カム地方の山また山、重畳と連なる山脈を切り開いて南流するメコ

▶ 普玉の谷の正面、六〇〇〇m峰



▼ダム・ドルの谷、ゴヨンI峰(6,252m右)とゴヨンII峰(6,140m左)北面

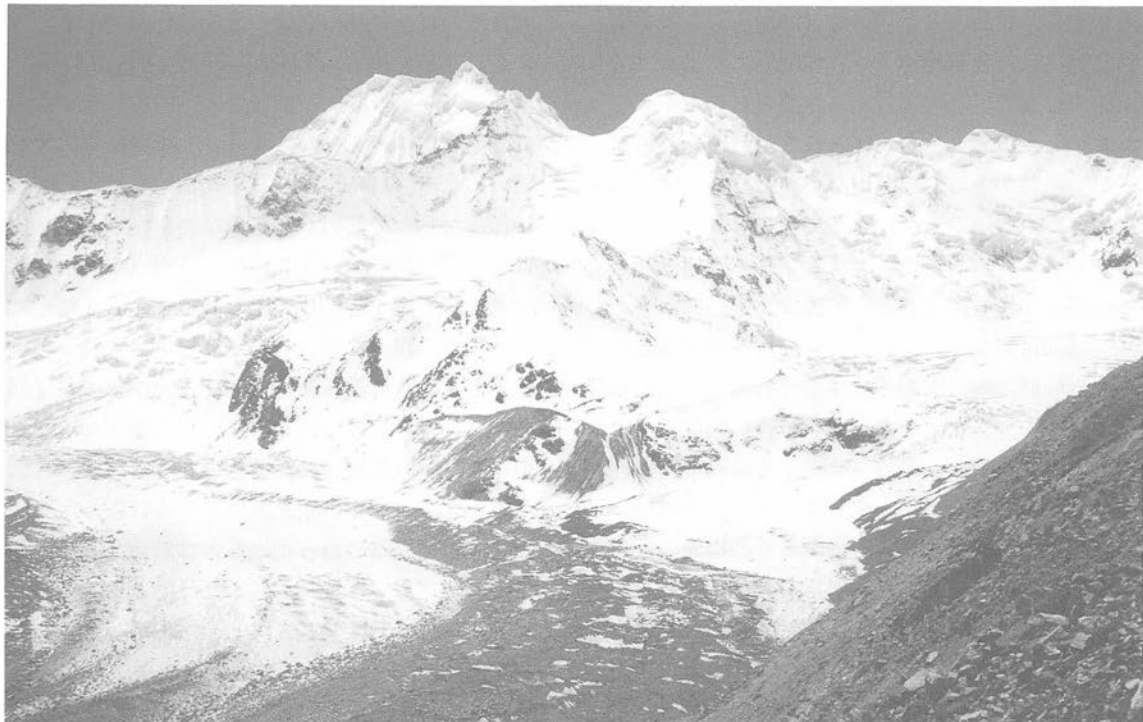


ン川（中国名：瀾滄江）の上流部の東の本流（ザ・チュー）と西の大きな支流（ノム・チュー）の合流点に昌都は位置する。カンパ族の世界、カム地方の交通、文化、経済の要衝である。地政学的には、新中国のチベット侵攻に最も激しく抵抗した土地である。徒手空拳で戦ったのが東チベットのカンパの戦士たちである。1959年にダライ・ラマはインドに逃れ、その後ダラムサルに亡命政権を樹立する。戦闘機をはじめ近代兵器を投入して攻撃する人民解放軍と単発銃とチベット刀で戦った勇猛なカンパにたいし、今でも中国政府は警戒心を解いていない。東チベットは非開放地域であり、外国人が自由に旅行できない遠因かもしれない。1950年に四川省西部から始まったチベット侵攻のときの幾つかの事実と逸話を、拙書『深い浸食の国』（山と溪谷社、2000）に書いた。

中華民国時代、東チベットは西は嘉黎から東は成都の150km西の雅安までカンパの版図をカバーする西康省という一つの省に括られていたが、新中国になって揚子江の上流・金沙江を境に二分された。カンパを土地の行政を意図的に分断したのかどうか分からないが、現在は西側がチベット自治区で東が四川省である。昌都はチベット自治区昌都地区の州都である。

現代史はこのくらいにする。今の昌都は建設ラッシュである。急ピッチで都会化が進んでいる。ビルが新築され、メコン川には新しい橋がかかり大規模な護岸工事が行われている。メイン・ストリートの商店街は衣変えをしつつある。ファッションブルな若い女性とラマ僧が街中を歩いても違和感がないのは辺境だからだろう。タクシーが増え交通渋滞すら起きている。車は上海フォルクスワーゲンのサンタナである。多過ぎるくらいのレストランがあり繁盛している。四川料理が主であるが、「天津包子」（中国で一番旨い肉まん）や蘭州拉麺など各地の料理が食べられる。スーパー・マーケットも幾つもあり何でも揃っている。ミニ・ラサである。西部大開発の拠点

▼ダム・ドルの谷、チュンジュンツォ峠（6,204m）北東面（左下、氷河湖越しに望む同峰）



になっている。

午前中に昌都の街を見下ろす総本山、昌都強巴林寺を訪れる。かつて1,200人いた僧侶は現在は800人である。この僧院の最高位のラマはチベット自治区政府の高官であり、人民代表大会の代表を務めている。妻帯し子供もいるので還俗した身分だが、この地方のカンバは彼を強巴林寺のトップとして崇拝している。中国政府寄りの立場を鮮明にすることにより、より多くの開発援助を引き出し、経済発展に貢献している。チベット族を宗教的に束ねる影響力のある人物が中国政府の対チベット政策を容認している。人口比でいえば漢民

族12億に対してチベット族600万人、僅か0.2%である。そのうちチベット自治区に住むチベット族は300万人である。私見だが、中国にとってチベット問題は仕上げの段階に入りつつある。600万人が12億人に飲み込まれる日はそう遠くないだろう。

5月14日、晴。7:30、3℃。午前9時に昌都出発。公路は支流のノム・チューの左岸をしばらく行き、20分ほどで俄洛橋を渡り西に上る溪谷に入る。メコンの荒々しい景観から見事な針葉樹の原生林に変わる。岩峰が現れ、樹林帯との間の草地に美しい僧院が点在する。チベットとイタリアのドロミテ・アルプスが融合したような絵になる



▲ダム・ドルの谷、無名峰（6,156m）北面

風景である。カム地方の自然の多様性に認識を新たにす。11時、一つ目の峠(4550m)を越え樹林に囲まれた牧草地を下り、12時半に類鳥齊(3780m)に着く。この辺りから無機質な赤みがあった乾燥した世界になる。30kmほど離れたところに名高い僧院があるが時間がないのでパスする。類鳥齊は野生の馬の生息地としても知られる。交通の要でもあり青海省のナンチェンから玉樹へ通じる公路との分岐点である。午後2時半、二つ目の峠(4650m)を越え、那龍という村を過ぎると幅広い岩峰群の裾に広がる放牧地(4190m)にでる。たくさんのヤクが草を食んでいる。長閑な風景である。大休止をし、車のブレーキを再点検・修理する。道は谷を下ると一変してゴルジュ帯にはいる。兩岸は赤茶けた高い岩壁である。指先のような奇峰が面白い。5時に月世界のような峡谷を抜ける。三つの村を通過して、7時に丁青(3830m)に着く。

川蔵北路は南路に比べると道路の状態は悪いし、沿道の町の開発・整備は遅れている。丁青の街は舗装していない。恐ろしく殺風景である。安宿にはトイレはない。それでも街中に公衆電話はあり、まともな四川料理が食べられる。夜中に公安に二回起こされる。

5月15日、晴。7:15、5℃。午前8時出発。丁青の周辺は赤茶けた不毛な土地である。が、山腹のラマ僧院と色彩が調和している。今日は谷筋を上り下りして四つの峠を越えなければならない。9時過ぎに一つ目の峠(4320m)、12時に二つ目の峠(4820m)に立つ。少し下ると北東の谷の奥に無名の6000mの山塊(最高峰は6104m)がよく見える。二つのピークが印象に残る。午後2時半、三つ目の峠(4460m)から布加崗日(6328m)の眺望を期待したが当てが外れる。断念していたところ、最後の高原状の峠(4550m)から東に布加崗日山塊の全貌が姿を見せた。5時、巴青(4160m)の町をバイパスして先を急ぐ。カンバの世界から中央チベット高原に入る。6時、索県(3980m)に着く。舗装なし、恐ろしく埃っぽい。ゴミのなかの街の感じである。バイクの往来が多い。郵政賓館に泊まる。南の洛隆より暖かい。気候が春になったからだろうか。ここには二つの大きな

僧院がある。一つはラサのポタラ宮を模して造営しただけに丘に建つ高層の僧院は立派である。

5月16日、快晴。7:00、5℃。午前8時半、出発。谷を上り4500m前後の大高原をひたすら西に走る。東チベットからチベット中央高原に足を踏み入れる。11時半、峠(4775m)を越えるが起伏はなだらかで何処が最高点なのか判別が難しい。12時半、怒江の辺の比如への分岐点(4420m)を通過し、午後1時に比如県夏曲で昼食。3時半にヤクの遊ぶ雄大な峠(4950m)を越え大高原を疾駆する。さらに最後の峠(4860m)を過ぎれば那曲(4540m)は近い。5時半に那曲飯店に到着。街はすっかり整備され都会的になっている。台湾やヨーロッパからの観光客でホテルは賑わっている。辺境の旅は終わった。あとは舗装された青蔵公路の快適なドライブが残るだけである。

5月17日、晴後曇。8:00、5℃。8時半、那曲を出発。「一路平安」ラサへ向かってチベット高原をひたすら走る。12時、懐かしい当雄(4310m)で昼食。念青唐古拉山(7162m)が見え隠れする。午後2時半、羊八井を通過、谷沿いの公路の対岸で青蔵鉄道のトンネル部分の工事が進行している。4時、ラサに帰着、24日間の全行程を無事終了する。魏の車のメーターは3645kmの走行距離を示している。これにラサ空港との二回の往復距離を合わせるとほぼ4000kmに達する。

5月18日、中国西藏登山協会の張江援氏から中国人民解放军参謀部測繪局の1:100,000の地形図を見せてもらい、我々が写真に収めた6,000m以上の山と近辺の6,000m峰の正しい標高を、ソ連の1:200,000の地図の上書き留める。記録を外部に発表するに際して正確を期するためである。5月19日、ラサから成都に飛ぶ。ジョン・ハーリンとマーク・ジェンキンスに同行した私の馴染みのガイド、レニー陳から成果のほどを聞く。5月21日、北京に行く。中国登山協会の幹部に表敬してから、5月24日に帰国する。実の多い満ち足りた山旅であった。

III 旅行費用

日本人が相場を吊り上げ、後から来る人たちに迷惑をかけるのではないか、という批判を承知の上で、旅にかかった総費用を公開し、ご参考に供

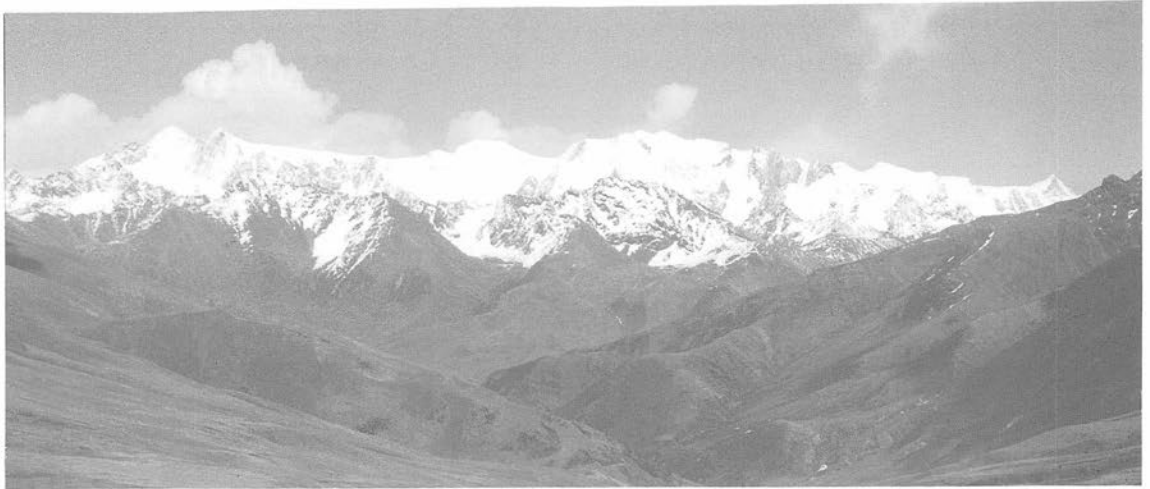
したい。それぞれの項目の単価も高いが、許可取得の費用が大きな負担であった。那曲、林芝、昌都の三つの非開放地区を通過し、外国人が入域困

難なセンシティブな土地、東チベット最深部の嘉黎、ペンバ、洛隆に入るため一人当たり U S \$ 2,000、三人で U S \$ 6,000 も支払った。

費用の項目	費用の明細	金額
総合サービス費	中村・永井・河西 \$ 70x 3 人x 27日 - 5 %	\$ 5,386
航空運賃他	成都ーラサ：中村・永井・河西 \$ 161x 3 人	\$ 483
(含空港税)	ラサー成都：中村・永井・河西 \$ 161x 3 人	\$ 483
	福岡ー上海ー成都：永井	\$ 1,000
	成都ー福岡（直行便）：永井	\$ 420
	成都ー北京：中村・河西 \$ 126.8x 2 人	\$ 253
	成田ー上海ー成都：中村・河西 \$ 770x 2 人	\$ 1,540
	北京ー成田：中村・河西 \$ 456x 2 人	\$ 912
中国査証料	中村・永井・河西 \$ 77x 3 人	\$ 231
宿 泊 費	上海（紅港飯店）中村・永井・河西 \$ 50x 3 人x 1 泊	\$ 150
	成都（岷山飯店）中村・永井・河西 \$ 75x 3 人x 3 泊	\$ 675
	ラサ（金橋飯店）中村・永井・河西 \$ 44x 3 人x 4 泊	\$ 528
	途中（八一鎮…昌都…那曲）中村・永井・河西 3 人	\$ 716
キャラバン	第 1 日：馬10頭、馬方・人夫 8 人 \$ 10x18馬・人	\$ 180
	第 2 日：馬13頭、馬方・人夫 9 人 \$ 10x22馬・人	\$ 220
	下記は総合サービス費に含む：	
	コック 50元／日 x26日 = \$ 158.5	
	シガレットと酒（土産）277元 = \$ 33.8	
保 険	中村・永井・河西 \$ 10x 3 人	\$ 30
車 費 用	車・陳（走行3357km+停滞 [10日] 1000km=）4357kmx \$ 0.60	\$ 2,614
	車・魏（走行3940km+停滞 [9日] 900km=）4840kmx \$ 0.60	\$ 2,904
そ の 他	4月22日成都空港：重量超過チャージ 323元	\$ 39
許 可 費	非開放地区：八一陳ー波蜜ー洛隆ー昌都ー丁青ー那曲 (中村・永井・河西 3 人 各 \$ 2,000)	\$ 6,000
合 計		\$ 24,764

単位：U S ドル。円・ドル為替レートにより変わるが、大まかに言えば一人約100万円かかっている。

▼川蔵北路の北一布加崗岩（6,328m）山塊



参考文献・地図

〔外国語版〕

The Alpine Journal 1998,1999 London

Chris Bonington & Charles, Clark, *TIBET'S SECRET MOUNTAIN-The Triumph of Sepu Kangri*, London 1999

John Hanbury-Tracy, *BLACK RIVER OF TIBET*, London 1940

Ronald Kaulback, *SALWEEN*, London 1936

Frank Kingdon-Ward, *THE RIDDLE OF THE TSANGPO GORGES*, London 1926

Fransis Younghusband, *PEKING TO LHASA (Journeys made by Briagadier-General George Pereira)*, London 1925

J.T.Walker, *Four Year's Journeyings through Great Tibet, by one of the Trans-Himalayan Explorers of the Survey of India*, Proceedings of RGS, Vol.VII London 1885

J.B.N.Hennessey, *Explorations in Great Tibet and Mongolia, by A-K, 1879-1882 made in connection with the Trigonometrical Branch, Survey of India*, Dehra Dun 1884

旧ソ連製、1 : 500,000 & 1 : 200,000 地形図

〔中国語版〕

中国科学院青藏高原綜合科学考察隊『西藏冰川』北京 1986

中国科学院蘭州冰川凍土研究所『中国冰川概説』北京 1988

科学出版社『青藏高原冰川气候与環境－1989年中日青藏高原冰川考察研究』1993

中国地図出版社『青藏高原山峰図 1 : 2,500,000』1989

中国人民解放军参謀部測量局 1 : 100,000 地形図

西藏人民出版社『雪域神山』中国登山協会・中国西藏登山協会編、1995

〔日本語版〕

F. キングドン・ウォード、金子民雄訳『ツェンポー峡谷の謎』岩波文庫、2000

山と溪谷社『岩と雪』80号、1982年4月

山と溪谷社『山と溪谷』1994年8月

古今書院『地理』41－1、1996年1月

古今書院『世界の山やま』地理9月号増刊、1995年

地域ニュース

《ネパール》

今秋のネパール近況

'02秋のネパールヒマラヤはネパール観光省によると77隊（11月7日時点）の入山があったと言う。昨年秋の55隊から大幅に増え、ロイヤリティ収入も増えたという。アフガニスタン・インド問題を抱えるパキスタンから転進した隊もあったとは思われるが、新解禁峰が一挙に増え未知の山、情報の乏しい山に興味を感じる登山者が当初考えられた以上に多かった事がわかる。また全体的に少人数のライトなスタイルの登山隊が増えている。

ラムタン・チャン（6812m）[スロベニア]、ボクタ・ピーク（6143m）[日本]、タルン（7349m）[日本・チェコ]、ニレカ・ピーク（6159m）[日本]、ガウギリ（6110m）[日本]、テンギ・ラギ・タウ（6943m）[日本]、ノンバイゴスム（7312m）[アメリカ] 等である。

国際山岳年を記念して解禁峰を一挙に増やし、ルールを改正したネパールの政策はこの結果を見る限り大成功といえるのではないかな。

その一方でマオイストの問題は依然として改善する様子はなく、状況は場所によって悪化しているところもある。

今秋カンチェンジュンガエリアではキラトチュリ隊（スロベニア）が入山途中でマオイストに資金提供を求められ、下山はヘリコプターで逃げ帰った事件や欧米人トレッカーグループも同様にゴルジャ村でマオイストに資金提供を求められ、やむなく引き返した事件など外国人を対象とした事件が発生している。

ドバン村では発電施設が破壊されており、ママンケ村では圧力鍋爆弾が爆破未遂で発見された。既にスケタ（タブレジュン）空港から1日しか離れていない村でもマオイストの赤旗が立ち、村ではトンバ（地酒）どころかコーラを飲むのも制限されている。西ネパールから広がったマオイストの活動は既にネパール東端にまで達してしまった

のである。

マオイストはポーターを装って山岳地域に入りこみ、広がって行くという。登山隊の雇うポーターにマオイストが入らない様に細心の注意が必要である。またそのような状況から武器として利用される恐れのある圧力鍋やテントのフレームなどが入山の際に警察や軍隊に取り上げられる危険もあるのでその点も注意が必要である。

こうした状況でも多くの登山隊やトレッカーが入山しているのも事実であり、今後どここのエリアに入るにもこのネパールの現状を知っておく事は大切だと思われる。

- *新しいルールで6500m以下の山ではリエゾン・オフィサー不要となっていました、ダモダールヒマール（ムスタンエリア）の山には高さに関わらずリエゾン・オフィサーが必要です。
- *60日以上滞在する場合に必要なビザの延長料金が\$50から\$30に値下げされました。

（記：林 雅樹）

テンギ・ラギ・タウ(6,943m)初登頂

北海道山岳連盟が、テンギ・ラギ・タウに派遣した登山隊（江崎幸一(50)隊長ら5名）は、12月4日、南東面から江崎隊長と高橋留智亜(37)副隊長の2名が初登頂に成功した。

《パキスタン》

登山料半額が延長される

パキスタン政府は、2003年がナンガ・パルバット登頂50年、2004年がK2登頂50年に当るのを記念して、国際山岳年の2002年と同様に50%割引とすると発表した。

《中国》

ギャチュン・カン(7,952m)に登頂

ギャチュン・カンの中国側から登頂を目指していた山野井泰史(37)がスロヴェニア・ルートから10月8日登頂に成功した。当初の目標は泰史が単独で北東壁を登る予定であったが、壁の状態が悪

いため北壁スロヴェニア・ルートに妙子(46)と夫妻で取り付いた。妙子は7,600mで不調のため登行を断念し泰史が単独で登頂し、合流後ビバーク。下降中の10日、妙子が雪崩に飛ばされ、50mロープ一杯で止まったものの、左手の手袋を失い、頭部を約8cm切り、左眼が見えなくなった。泰史がシングル・ロープで妙子の所に下降し、再び登り返している時、2度雪崩が発生し眼を傷つけられたらしい。ロープの始点に着き懸垂下降のためのピトンを打とうとするが見えないため、手袋をはずして手探りでリスを探し、ピトンを打ち下降して合流。13日BCに到着した。

《ブータン》

WTO加盟の選択を国益に

私たち(ブータン)が世界貿易機関(WTO)に加盟して世界の経済大国ともつきあうためには、膨大な準備が必要だ。加盟手続きでは大量の法令や布告が必要なほか、有能な監督機関も整備しなければならない。

加盟後は、劇的な変化に耐える資格がいる。自分たちが規則を作るのではなく、国外から規則を押しつけられるからだ。だが、他の途上国と同じくブータンもまた、地球規模の経済活動に采配を振っているWTOに「所属する」しか選択肢はないのだ。

これまで当局から営業許可を取得したり、それを転売したりするだけだったごくふつうのブータンの起業家にとって、WTO加盟は果たして意味があるものだろうか。

ブータンはインドとの自由貿易に支配されている。従って加盟国インドが被る影響はわが国に直結する。だからこそ、ブータン産のリンゴが、カシミール産のみならず、豪州産や米国産のリンゴと一緒にインドやバングラデッシュの市場で競い合うのだ。

ブータンは変革期を迎えている。12月初め、政府は外国からの直接投資を解禁した。自国産業の大半が外国資本の手中に入るかもしれない。

だが、脅威ばかりとも限らない。より質の高い

産業が生まれるかもしれない。インドやモンゴルのように多様な商品やサービスも享受できるだろう。WTO加盟に伴う法整備は、この小さく貧弱な市場にとって安全装置を果たしてくれる可能性もある。すでに国際舞台で圧倒されている私たちにとって、紛争解決の機関は歓迎すべきものだ。

私たちはWTO加盟からどんな利益を得ることができるか。それは、私たちが何を欲するかという明確な目標と、それを勝ち取る能力にかかっている。私たちのコンサルタントの最近の助言は明快だ。「WTOからは受動的にもらい受けるのではなく、交渉で奪い取るのです」

クエンセル紙(ブータン)社説=6日付け
(朝日新聞12月16日から)

トピックス

H A J 華甲望年会開かれる

12月14日(土)夕刻6時から4回目を迎えたH A J主催の「華甲望年会」が、東京、東池袋、かんぽヘルスプラザ東京に54名が出席して開かれた。

第1部は、中川裕常務理事の司会により、冒頭、酒井國光会長の挨拶があった。次いでH A Jが本年派遣した2隊の登山隊報告(ガッシャーブルムI=野沢井隊員、ニンチン・カンサ=樋上嘉秀副隊長)がスライドによって行われた。

第2部の司会は、野沢井歩専務理事となり、本年目出度く「還暦」を迎えられた出口當(4月・東京)、竹澤雄三(4月・栃木)、田村正勝(4月・東京)、西嶋鍊太郎(8月・石川)の4氏に本日遠隔地から駆けつけて戴いた、今村裕隆(山口)、樋上嘉秀(大阪)、石川龍彦(奈良)、高橋敏雄(宮城)各氏がプレゼンターとなり、チベット、カム地方の男性が勇者の証しとして頭髮に巻く、赤い飾りが贈られた。次いで西嶋絵美(東京)、志村真由美(神奈川)、寺沢玲子(埼玉)、沢田幸子(東京)の女性陣から、古希までは枯れない花が贈呈された。

次いで望年会に移り、労山、西本武志理事長のご挨拶を戴き、J A C西村政晃常務理事のご発声で乾杯に移り宴席に移った。

会は、午後8時10分、尾形好雄常務理事の中締めでお開きとなった。

Books

全盲のクライマー、エベレストに立つ 海津正彦訳

地上数十センチでは流れるように動いていた身体が、足下に広がる大空間を意識して突然動かなくなったり、体から汗が噴出してくる。そんな経験を持っている人は多いと思う。たかが3級の動きが、とてもぎこちなく、時間がかかったりする。目指すルートに対峙したとき、雪や風、気温といった気象条件の前に、高みを目指す人々は、己の弱さと向き合わなくてはならない。

盲目の人間が高度感を実感できるのか？この本を読んでいると、健常者がいかに多くの情報を統合して自分の置かれた状態を認識し、解決しているのか、視覚を失われた人間が、残された感覚（聴覚、触覚、味覚）で得た情報から、どこまで自分の置かれた状況を判断し、行動できるのか？ということを教えてくれる。答えは、時間と習熟にかなりの時間が必要だが、適切なサポートがあれば、全盲の人間でもかなりのことが出来る事を著者は証明している。この本の中で、盲人には無縁だと思っていた高所恐怖症を体験したことも、彼は告白している。私の盲人にたいする偏見のかかなりの部分が消失し、健常者の能力について教わった。具体的なことは本を読みたい。

この本は、一昨年5月、エベレスト（8,848m）南東稜から1隊として最高数の登頂者、最高齢登頂記録とともに盲人による世界最高峰初登頂他の記録を打ち立てた登山隊の、その全盲（両義眼）の登山家エリック・ウェイヘンマイヤーがこの世に生まれてから、エベレストに登頂するまでの物語である。登山の本というよりは、エリックが視力を失っていく過程で経験した失望や挫折を、家族や友人の愛情や支援を受けて克服し、登山と出会い、よきパートナーを得て、新たな世界を切り拓いてきた物語だ。

この本は、マッキンリー登頂後、アコンカグア（6,959m）に2度目の挑戦で登頂した段階でいっ

たん出版され、エベレストの登頂の項は、その後補足されたものである。ひとつの自伝とするならアコンカグア登頂で十分に感動的であり、完結している。

エベレストは、エリック自身にとっても付け足しにすぎない。けれども登ってみなくてはならなかったし、高所登山の経験者としては気になるものだ。

エド・ヴィスチャーズやグREG・チャイルドといった有名どころから懐疑的な意見を表明されながらも、エリックは世界最高峰を目指し、登頂する。彼の所属した隊はいくつもの記録を樹立し、大成功となる。見事である。

全米盲人協会からの資金的サポートがあるとはいえ、登山隊としてこれほどの成功が出来た裏には、マネージメントだけではなく、チームワークを感じる。

個人の夢を支援するシステムがこれほどしっかりしているアメリカ社会への驚き。私がリーダーなら間違いなくロープを固定したと思うマッキンレーの頂上近くの雪稜で、ガイド1名と山仲間とエリックと一緒にコンテナスで登りも下りも行動している事へ脱帽し、この全盲の若者は決しておんぶに抱っここの登山をしたわけではなく、応分のパートナーとしての仲間の理解を勝ち得て登山をしたのだということへ畏敬の念を抱いた。「ハンディキャップ・レース」から「ハンディキャパーズ・レース」へと移行した観のあるエベレスト登山だが、自伝として十分に楽しめた。残念ながら邦題の品のなさ、（原題「世界で一番高い所の灯（Touch of the top of the world）」、）原著にあった写真の割愛などが誠に残念である。

文藝春秋、2,524円

（記：中川 裕）

海外トレッキング入門

「実践ガイド25コース」

日本勤労者山岳連盟海外委員会一編

国際山岳年記念出版として日本勤労者山岳連盟海外委員会によって編集されたトレッキング入門書。

「いつかは行きたいあの山、あのコース」とサブタイトルにある様に、始めて海外トレッキ

ングをされる方を対象に編集されている。

第1章として、トレッキングに必要な体力、技術力について述べられ、トレッキング中の必要な装備、食事の実際、様々なトラブルについて書かれている。そして最も心配される高山病についても触れている。

第2章からは各執筆者による体験談風に25のコースについて解説されている。諸情報も盛り込まれ、そのエリアは、ヒマラヤ諸国はもとより、アジア、北南米、ヨーロッパ、アフリカ、オセアニアと世界中多岐に渡る。代表的な一般的なコースが多く目新しいコースが少ないのが少々残念に思うが初めての海外トレッキングを目指す方の良い指針になる書である。

(株) 大月書店 2002年11月20日発行

253P、A5版、定価：2200円＋税

(記：野沢井 歩)

■ 寸 感 ■

読売新聞の12月5日付夕刊を読まれた方は、驚天したに違いない。その記事は囲みが入っていてタイトルは「ネパール未踏峰に無酸素登頂」となっていたのである。今どき六千メートル峰に登って「無酸素」と書かれたのでは登山隊が可愛相というものである。まさか情報を提供している登山隊の事務局がこのような表現をするとは思えない。いくら社会面の記事とはいえ信じられないことである。このようなことのないように、登山の正しい知識、情報を各界に提供することも、登山の進展のために必要なことは論を待たない。そのためにも一刻も早い「海外登山情報センター」の開設が必要であると思う。「所詮、山は遊び！と済ませてしまっているのですか？」 (山森)

事務局日誌 (12月)

- 3日(火) チベット登山協会、ニマ・ツェリン氏来日の件、関係者への依頼
4日(水) 北ア、北部遭対協・登山案内人組合合同研修会 (於、信濃大町、山森)

ヒマラヤから

ランシサ・リ便り

ナマステ。関空からの出発が予定より5時間遅れて、カトマンズには朝の4時に着きました。準備作業は順調に進み、11月21日、バスでシャブルベンシに出発です。めざすはランタン谷のランシサ・リ(6,427m)です。22日からキャラバンです。澄んだ空気と山と谷が私を待っています。

11月19日 カトマンズにて 坂本 正治

■財政支援 中川裕5万円

東京集会のお知らせ

日時 1月27日(月) 午後7時～
内容 新年会
場所 HAJルーム (地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

- 9日(月) 日中女子チョー・オユー合同登山隊歓迎会 (於、中村屋、山森)
10日(火) ヒマラヤ374号発送
14日(土) 「HAJ華甲望会」(於、かんぽヘルスプラザ東京) 54名
24日(火) 東京集会 (10名)
26日(木) 仕事納め

ヒマラヤ No.375 (2月号)

平成15年1月10日印刷 15年2月1日発行
発行人 山森欣一
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ

トレッキング・登山の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆
キャラバンデスク
(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本社

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1



西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■大阪営業所/〒530-0026

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料)をご利用下さい。

☎0120-811395

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒108-8010 東京都港区港南2-3-13
TEL: (03) 3740-2674 (直)
<http://www.tokyo-np.co.jp/>

最新 クライミング技術

ジム・アレンのフリークライミングからマウンテン・アルパイン・バックウォールまで、すべてのクライミングに必須の技術(クライミングの技術)を、これまでにないほど詳しく解説。実践的なクライミングのノウハウ、心構えなども細かくトビヤス。

菊地敏之 著

1600円

山小屋の主人の 炉端語

著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る一人話の取って置きの物語。

工藤隆雄 著

1500円

すぐ役立つ 山の花学

「飛騨高山の花博士」として知られる著者の、山の花見術入門書。

小野木三郎 著

1456円

すぐ役立つ 山の気象と救急法

山の気象と避難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。

飯田睦治郎 著

1359円

すぐ役立つ 記念日の山に登ろう

人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山はどれか。

石井光造 著

1300円

北アルプス やまびと物語

「岳人」に3年余り連載した「山人探訪」男達の賦に加筆、登山をより楽しむための一冊。

柳原修一 著

1456円

北アルプス 山小屋物語

歴史を刻んできた66軒の山小屋をめぐる山と人の物語。

柳原修一 著

1456円

花と歴史の50山

「花と歴史の旅」の第2弾。花の山々を訪れた珠玉のエッセイ集。

田中澄江 著

1359円

増補 六十歳からの 日本三百名山

60歳から13年間で三百座を踏破したスーパ―お爺さんの山行記。

田中三郎 著

1456円

新・山靴の音

選歴をわかった著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。

芳野満彦 著

1262円

中高年登山 なんでも百科

「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむよう、中高年登山の虎の巻。

福島正明 著

1500円

登山の 運動生理学百科

「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」をヒマヤンなど高所登山実績を踏まえて分かりやすくまとめた。

山本正嘉 著

2000円

山書散策

今まで数多く発刊された山書、何を読んだらいいか、そんな時の指針として――「山人」連載時から好評。

河村正之 著

1500円

※本体価格に消費税が加算されます。

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

●登山本店／〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
●新宿西口店／〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
●神田登山店／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキビル2F) ☎03-3295-0622
●神田本館／〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
●八王子店／〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
●大宮店／〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
●高崎店／〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
●川越店／〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
●甲府店／〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
●宇都宮今泉店／〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
●太田高林店／〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
●松本店／〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
●長野店／〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
●新潟店／〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

●新潟とやの店／〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
●仙台店／〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
●秋田広小路店／〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
●盛岡大通店／〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
●札幌店／〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
●北十二条店／〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
●伏古店／〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
●平岡店／〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
●外商部(メールオーダー係)／〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所／〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004